

# 社会科

## 1. 表現力を育てる社会科

丸山 豊

### 1. 本校の文化行事と社会科

本校での諸行事をふりかえると、社会科として関わりが深いものが数多くある。

- 憲法講演会………憲法記念日を中心に行うもので、1987年度より開始、森英樹氏、野間美喜子氏、1989年度は、「心に刻むアウシュヴィツ展」の事務局より、大矢博之氏、市川百世氏に講演いただいた。本校の平和教育の一環をなすものである。
- 合唱コンクール………中、高とも実施
- 演劇コンクール………中学のみ実施
- 研究旅行………以前は広島、昨年度より長崎、平和学習としての伝統をもつ

これらの諸行事は、時として日常の社会科では到達できない程の成果をもたらすこともあり、一方、社会科としての学習が不足だったため、逆の結果に終わることもしばしばある。

合唱コンクールを例にとってみよう。ときどき社会科の教材にしたいような選曲を生徒が行う。「木琴」という合唱曲。妹が空襲で死んでしまう詩。生徒たちは「暗くていやだ」と嘆いていた。1987年度の課題曲は「消えた8月」であった。高校全クラスが練習した。一瞬にして生命を奪った原爆への怒りを感情を殺してその悲劇をうたいあげ、聴く者に歴史を蘇らせる合唱曲である。生徒たちの歌声をききながら、これは「歴史表現」そのものではないかと感じた。生徒自身練習過程で壁に必ずぶちあたる。感情として歌いこめないわけだ。単なるハーモニー、発声の問題ではなく、歴史認識の壁なのである。

本校は「平和学習」に社会科としても意識的に取り組み、1987年度は高2研究旅行で、広島、大久野島を選び歴史認識の形成を目指してきた。しかしこの取り組みが、どの程度、彼らの意識に定着し発展してきたかは明らかではない。この旅行を体験した高3が彼らなりに「消えた8月」を歌いあげた。

学んだ知識を体系化し、表現に高めることが中高の

教育現場でもっと追求されてもよいのではないか。

演劇コンクールは、中学で取り組んで10年近くなる。社会科との関わりの深い脚本として『ペロ出しチョンマ』、『ヌチドタカラ』があった。前者は江戸時代の農民一揆、後者は沖縄戦を主題にしたものである。いずれも歴史を学ぶことなしには上演できないものであった。授業から学べるもの、そして表現しながら生徒自身が学んでいくもの、この両者の統一をどう求めていくかが、本論のテーマでもある。

### 2. 歴史表現をどう考えるか

伝統的な民俗表現（歌舞音楽）は、別の機会に譲るとして、まず「表現とは何かを創造すること」の前提に立ち、その過程の中で何か学べるのかを実践の中心とした。歴史を土台とした創造的（想像的）表現が、高校生でどこまで可能なのか。

本多公栄氏の実践、「紙芝居づくりで生きた歴史感覚を」（『日本史の授業』1987年日本書籍）に学んで、高校生に次の課題を与えた。

- 歴史紙芝居制作
- 創作歴史マンガ
- 自分史

#### (1)課題をどう与えたか

##### A. 歴史紙芝居を創作してみよう

グループ（3～5人）の共同制作もよい

- ①世界史の中から自由にテーマを選ぶ。
- ②制作スケジュールをたてる。
- ③資料を探す。
- ④解説を考える。1枚あたり200字から300字
- ⑤絵はハッ切 10枚～15枚 カラー作品

評価 歴史の鋭さ、眼の確かさをみる。

##### B. 歴史創作マンガをかいてみよう

- ①世界史よりテーマを選ぶ。
- ②マンガ本として装丁する。

③ページ，体裁は自由。

評価 ふざけ半分にならないこと。

C. 父母，私の歴史を客観的に綴ってみよう

①父または母がそれぞれ生きてきた歴史の中でどんな出来事が生き方に影響を与えたか聞きとり調査をして綴ってみよう。

②自分の17年間を振り返って，何が自分に影響を与えたのかを分析する。流行歌，TVドラマ，新聞，ニュース，社会，経済，文化等の様々なジャンルから自分の17年間を調べてみよう。

創作歴史マンガ

1. モーセ 出エジプト
2. 普照
3. 古代ローマ帝国とキリスト教
4. 承久の乱
5. フランス革命
6. アヘン戦争への道
7. 19世紀のヨーロッパ文化
8. ヒトラー
9. 2. 26事件
10. 力なきムソリーニ

(2)どんな作品が提出されたか

高校2年生 132名中 提出 126名 (95%)

課題分類

紙芝居 24編 グループ制作  
マンガ 10編 26グループ119名に及ぶ  
自分史 4編

歴史紙芝居

- |                               |                |
|-------------------------------|----------------|
| 1. エジプト文明                     | ① イエスの生涯を描いたもの |
| 2. 謎と神秘の国エジプト                 | ② 秦から漢時代の民衆    |
| 3. ツタンカーメン王墓の発掘               | ③ アメリカ独立革命     |
| 4. クレタ                        | ④ マリーアントワネット   |
| 5. シーザーの最期                    | ⑤ ユダヤ問題        |
| 6. PAX-ROMANA                 |                |
| 7. シュリーマン                     |                |
| 8. 私は天から下ってきたパン <sup>①</sup>  |                |
| 9. アレクサンドロス                   |                |
| 10. アレクサンドロスの帝国               |                |
| 11. 将出自農 <sup>②</sup>         |                |
| 12. 鴻門之会                      |                |
| 13. 中国仁侠伝 李布                  |                |
| 14. シャージャ・ハーン                 |                |
| 15. ジャンヌ・ダルク                  |                |
| 16. エカテリーナⅡ世                  |                |
| 17. Liberty Way <sup>③</sup>  |                |
| 18. 立ち上がれ民衆よ                  |                |
| 19. 悲劇の女王 マリーちゃん <sup>④</sup> |                |
| 20. ナポレオン                     |                |
| 21. ナポレオン 皇帝への道               |                |
| 22. 南北戦争                      |                |
| 23. 夏目漱石                      |                |
| 24. シオンの丘で会おう <sup>⑤</sup>    |                |

(3)作品から考えられること

①紙芝居かマンガか

紙芝居，マンガの制作をグループで行ったものが大変目立つ。これは，本校が小規模校で（各学年3クラス）クラスの枠が日常的にとりはられていることが底流にみられる。しかし，友人関係を土台としての作品づくりは，テーマの設定，中身の検討も安易なものへ妥協していく傾向が，特に紙芝居グループに目立つ。

テーマが常識的で歴史の視点という観点からみれば，少々物足りない。これは私の授業そのものが問題意識，興味関心等呼びおこすものではなかったということであろう。いずれにせよ，歴史の見方，考え方を育てる歴史学習が表現力へつながる。

グループ制作は授業の中で準備過程を確保してなかったため，各グループでの差が目立った。分業化によって全体像がつかめないままに終わったグループ，または，特定の個人に集中し他は余り参加しなかったグループなど（報告レポートより）高校生の集団化へのとり組みのむずかしさを感じさせた。

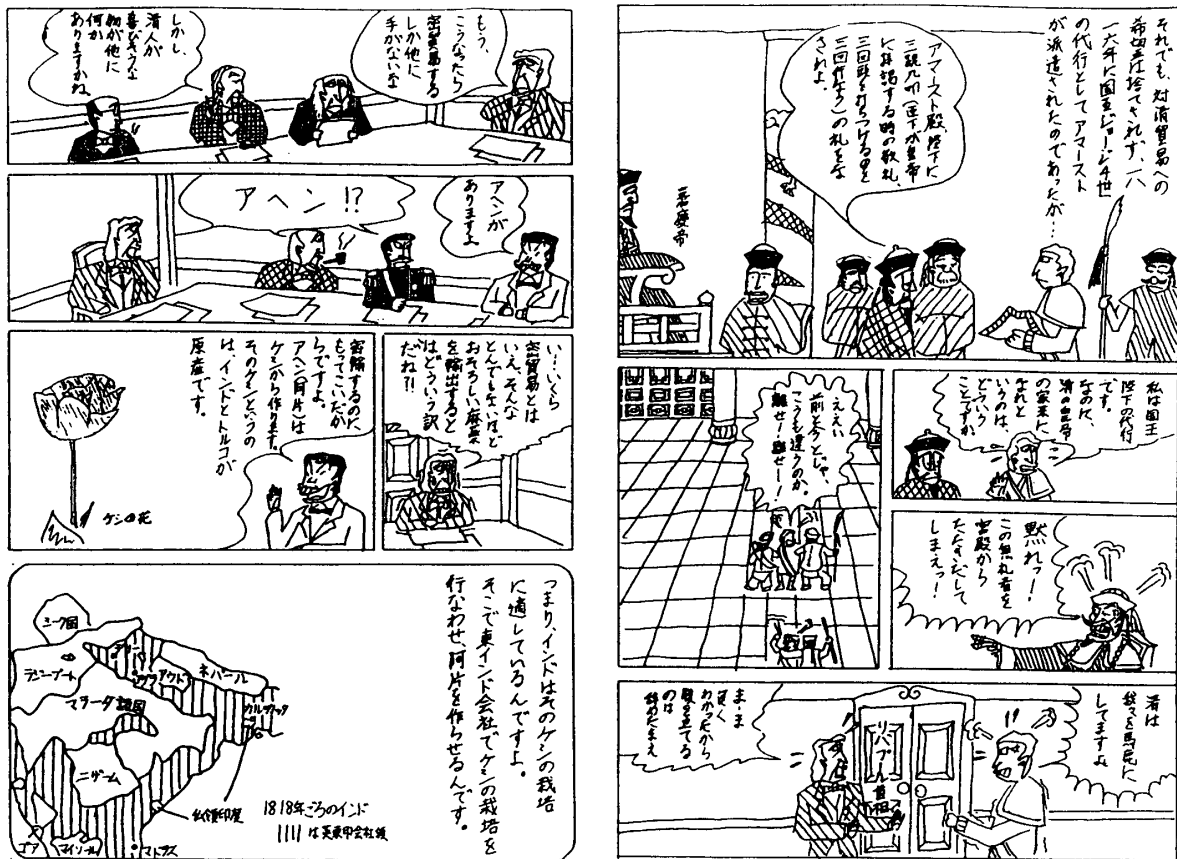
マンガを選んだ者（及びグループ）は，紙芝居を選んだ者より積極的で内容の濃い作品が多かった。マンガの方が描写を詳しくし，かつ会話体で進行させねばならない。マンガ世代はそれをいとも簡単にやっけてしまう。

3. 作品の中から

「阿片戦争への道」（マンガ，個人作品，男子）

次ページ参照

S君は，この作品についての動機をこう表現している。（「阿片戦争への道」がまさかこんな力作になるとは思ってもみなかった。なぜ，阿片戦争をマンガにしようと思ったかというのは，この戦争が中国の運命を



マンガ「阿片戦争への道」より

変えた戦争だったからである。これを境に中国は色々と弱みを握られ半植民地化の道を進んでいった。) ……レポートより……

S君は、どちらかというクラスの中ではいじめられ易いタイプ。一人で黙々とマンガ制作に励んだに違いない。読書家でもあるS君は、阿片戦争の文献を読みあさり、夏休みの大半をマンガ制作に充て、課題提出第一号となった。私はS君の社会科好きを知っていたが、作品を読んでその表現力の豊かさ、史実の確かさ、構成力に脱帽した。

阿片戦争後の中国、アジアこそ君のテーマではないのか、という私の指摘を受けて彼は続編に取り組んでいる。

「2. 26事件」(マンガ, グループ作品, 女子)

次ページ参照

2. 26事件のマンガ化に取り組んだHさんは、次のようにその動機を語る。

(私がこの課題を選んだのは、三島由紀夫の小説からこの事件に興味を持ったからです。確かな信念を持った将校たちの善となるべき行為が反逆となってしまったことに憤り、もしくは哀愁を感じて自分自身の手による自分の思い入れで描いた、2. 26事件を創り出

してみたいと思いました。教科書を見れば、彼らは反逆者として描かれています。けれど彼らにしてみればそれはとんだ濡れ衣だったであろうと思い、極端に走る恐れもありはしたけれど、あくまで彼らの味方という立場に立った作品を描いてみました。)

女の子特有の情緒性が作品全体を貫いている。それは、与えられた歴史観への反逆であり逆転である。そこに彼女たちはマンガ世界をみる。史実と離れて遊ぶわけであり、ここに、社会科表現力としてのマンガの危険性がある。

S君は客観的であり実証的かつ史実をふまえている。いわば『学習マンガ』の世界であり、Hさんの「2. 26事件」は、文芸作品に近いものになっている。生徒は歴史に何を求めているのだろうか。

「シオンの丘で会おう」(紙芝居, グループ, 女子)

ユダヤ問題を扱った作品である。歴史の悲劇をファシズムとの関係から描こうとしている。この作品のおもしろさは、恐怖と悲劇を象徴的に表現している点にある。それだけに他の紙芝居とは違った印象を与え、発表会でも好評であった。ユダヤ問題に対しては学習不足の感も否めないが、紙芝居のもつ「絵」そのものの構成に対しては、積極的に新しい試みを取り入れており、高校生の感性の豊かさに驚きをうけた。

紙芝居の作品から



マンガ「2. 26事件」より

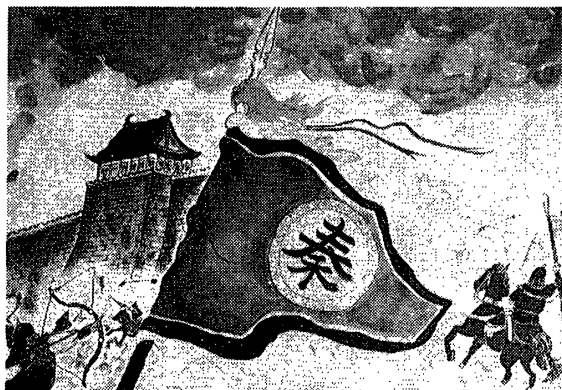


写真1. 『将出自農』より



写真2. 『ナポレオン』より

4. おわりに

社会科の表現力の一方法として、マンガ、紙芝居が果して適当かどうか疑問も残る。『ベルサイユのバラ』のマンガ作家、池田理代子さんは、「高校から大学へという時代に歴史を背景としたマンガにつながる内的な連続性のようなものは」なかったかという質問に対しこう答えている。<sup>注①</sup>

「歴史のなかで生きた人との全く感覚的なフィーリング的な出会い」がそのきっかけであり「共感しあえる部分」歴史マンガにも必要であることを指摘している。また、歴史の見方について「貴族の側からしか見えていない」という学者の批判に対し、「私は、貴族をかきたかった」という。

子どもたちに、マンガ等の表現を試みる前段階として、歴史をテーマとしたすぐれたマンガを教材として扱い、フィクションの中にも流れる見事な史観に気づき、また批判する力をつける日頃の努力が重要かと思う。

石子順氏は、このような教材として手塚治虫の「火の鳥、鳳凰編」<sup>注②</sup>がもっともふさわしいとしている。客観性、記録性、歴史的事実から教材にするのではなく、『当時の「不安な世の中』の状況をつかみ『階級制度や権力をもったものの暗闘、陰謀がうき彫りにされ』ていく様子、『歴史書には出てこない民衆、しいたげられた者たちを生き生きとらえていく』ことなどを、作者のテーマとして考えていくような、歴史観を育てる教材になるというわけである。そして『歴史とは、いつも民衆の流れ、その生と死によってつづられていく』んだなあという感慨と共感が、中高生にこそ改めて必要であり、歴史教育の土台に、このようなマンガを扱うことも重要ではないか。

生徒の作品をどう教材化するかは残された課題である。生徒の評価基準を育てていかないと、単なるストーリー性、ギャグ、絵のユニークさといった、感覚的なものへ傾斜してってしまう。しかし、高校生がこうも積極的に課題に取り組む姿に改めて私自身の日常の授業そのものの反省を迫られた。

注①、② 『歴史地理教育』(1980年、No310号)